

PHD LETTER

88

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

2003.9

- このままでは人間はダメになる?! . . . P.3
- 研修生レポート . . . P.4-5
- 私たちが変わるための試み② . . . P.6

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価：100円



第20期PHD研修生 スウェウィンさん
ビルマ、イエボ村 撮影 FUJINO T.

後ろにいるのは300羽のアイガモ。
日本に行って、稲作にこれが使えることを
勉強してきた。
1年目なので全てがうまくはいかないけれど
村の人も注目してる。

東西南北
問題解決
取組日記

スーチーさんはどこに

7月△日

夏の海外出張のひとつ目はビルマ。スタディツアーの形をとるが今シーズンはSARSの影響もあり、こじんまりと5人で出かける。

アウンサンスーチーさんの拘束が5月末以来解決しないままのビルマがどうなっているのか、少し緊張しながら入る。アメリカ、アセアン各国、遅ればせながら日本も外交的に影響力を行使している中で、何が感じられるか。

到着翌日訪ねたあるNGOの関係者に単刀直入、今、彼女がどこに居るか尋ねる。ラングーン(ヤンゴン)とバゴーの間のイエモンにある軍事施設内にいるらしいとの話を聞くが、一般にはほとんど情報はない。国内の報道メディアは政府系に限られ、国营テレビが2局、新聞も政府の動きを伝えるものだけ。その中で政治的関心のある人がラジオの短波放送のニュースを聞いている。BBC(英国)、Voice of America、Radio Free Asia(米国)、Democratic Voice Burma(ノルウェー)の4局でビルマ語でニュースを流しているという。一方で到着日に泊った宿のテレビで国营放送のニュースがCNNのものを一部を流していたのには驚いた。差し障りのないところを部分的に選んで使っているのだろう。

豊かさとは貧しさとは

GDPなどで測れば貧しい国であることに間違いはない。しかし、生活の中に豊かさを感じることもある。今回もラングーンからマンダレーへは夜行列車で行ったが、車内をまわってくる物売りの数と種類は圧巻。菓子、冷たい飲み物、ゆで卵、果物、天ぷら、貸本、貸枕、果てはアヒルの丸焼きまで。夕方5時から翌朝8時までの間にざっと



30種類。これに比べて日本の車内販売の味気ないこと。

マンダレーに到着し朝食にマウンティという麺料理を食べる。ビルマの麺と言えば米粉の麺に魚のスープのモヒンガーが有名だが、マウンティは汁なしの形。3~4種ある麺を選びそこに何種類かの具と調味料で食べる。そのお店の前に路上ガラクタというかジャンク屋が並ぶ。電気、機械、車等のパーツをいろいろ並べて売っている。同種のをいくつか並べてあるのでゴミ捨て場ではないとわかるが、こんなもの誰が買うんかいというもの。研修生にも「こんな、売れるの」と聞いたら、「ビルマは世界の最終処分地、ここからゴミは外に出ない」との答え。経済的に貧しいが故に徹底的に物を使う。以前にも日本の中古車がバスを含めて、この国で大量に走っていることをお伝えしたが、車だけではない。日本の荒ゴミの日に出来るものを思い出して、ここの持続可能な社会の実践に考えさせられる。経済的に貧しいことが全てに悪いことではなく、経済的に豊かなことが全てに良いことではない。



ひきしめ策ふたつ

マンダレーに近いタダインシェとイエボの村で研修生に再会。彼らのそれぞれの活動の話も聞き、田畑に出かけ様子を見る。ここについては別頁に報告するが、村にもこれまでにない動きがある。私たちの訪問した日とその前日に、村で一種の軍事教練があった。マチから軍関係者が指導に来るので村の一家族から男性を一人出すようにとのおふれがまわる。欠席する家は1500K(チャット)(村の農作業の日雇い一日分の収入で約300K)を代

わりに払わなければならない。その2日間で何をするかといえば「気をつけ、右向け右、敬礼」といった類の練習だったようだ。村人に軍の存在を示す行事だろう。各村で実施するので、軍関係者の数が足りないのか、実際に軍人は来ず、村の人間だけでやったという。さらにその翌日には今度は各家から一人女性を出すようにとの村長からの指示。政府が村へ本や雑誌の贈呈式を行うとのこと。新聞用の取材もあり、村人へ渡すところを写真に撮ると、その本を片付けて、また持って帰ったようだ。村人もあきれ顔でこのふたつのできごとを話してくれた。国民の不満の高まりや、政府への忠誠が弱まることへの対策なのだろうか。これもアウンサンスーチーさんの一件と無関係ではないだろう。

支援の難しさ

訪ねた先に海外のNGOの支援で井戸とトイレが作られていた。村の人に役に立ってるかと尋ねると困った顔。作ってもらって、それはそれで嬉しかった。しかし井戸は公共のものとして村長が設置場所を決めたのだが、その使用の目的が飲用か洗濯・水浴び用かでもめ、壊れた時の修理を誰がするか決まらず、結局、今は使われていない。トイレは同じく村の誰が使ってもいいものなのだが、後始末を誰がするか、敷地を提供した人がそれを引き受けることには納得せず、結局これも使われていない。「他人のウンチの始末を何でせにゃなんの」ということ。井戸、トイレともその設備は特に問題ないのだが、それをどう管理するかがうまくいっていない。みんなのためにという目的のためには、それを使いこなすところにみんなの参加がなければならない。設備だけでは機能しない。支援の難しさを見る。

帰りの飛行機でタイの英字紙、日本の新聞に目を通す。私たちの滞在の間ビルマをめぐる動きがあったことを知る。その現場に居てもかえって見えないこと、知ることができないことがある。今のビルマでは特にそうだ。この国の人々とのつながりには学ぶことが多い。

総主事代行 藤野達也

このままでは人間はダメになる?!

~第13期林業体験合宿“下草刈り”を通して~

7月5日、6日に今年度の研修生3人を含む計17人が参加し、第13期林業体験合宿“下草刈り”を開催しました。2日とも良い天気ではありませんでしたが、屋外の作業もこなすことができました。スギやヒノキが植林された山では、手入れをすることによって良い木材もできるし山としても良い状態になります。今回行った林業体験は、雑草が日光を遮らないように木の周りの草を刈る作業です。そして、苗が下草より大きくなるまでほぼ毎年、草のよく成長する暑い時期に行きます。ちなみに秋(11月頃)には、枝打ち・間伐とって、良い木材にするために枝を切ったり、木を間引いたりする作業も体験します。

5日の午後に1時間半の里山見学、その後翌日に使う鎌を砥ぎ、夜には財団法人大山振興会の理事長をはじめとして理事の方々との学習・交流会を持ちました。里山見学は、きちんと手入れされている山と放置されている山の違いを見るために当会のボランティアYさん名義で借りている山に行きました。大山振興会がこの春から始めた「丹波おおやま里山オーナー事業」です。スギやヒノキの針葉樹と広葉樹からなる民有林で25区画(各区画約1000m)あります。その1区画を借りて、間伐などの山の手入れ、間伐材を使った工作、椎茸の栽培や栗ひろいなどもできるといいます。これまで、全4回のオーナーのためのワークショップ(NPO法人「食と農のデザインセンター」企画)があり、全員で使う広場の整備や今後のことについて話し合いました。2週間前に草刈りをしたばかりの広場に遠慮なく再び草が茂っていて、ワークショップにも参加した人たちはその生命力に驚くと同時に、残念な様子でもありました。

6日の下草刈り本番は、何とか雨が止み予定通り行われました。集合場所から歩いて現場まで約30分、現場は急な傾斜で草を刈りながら上に向かっていくのですが、四つん這いにならないといけないことも度々でした。曇り空で日差しはないもの

のやはり暑く、大いに汗をかいた作業でした。体験合宿の参加者はケガなく無事でしたが、作業後、宿に帰り着いた途端、PHD協会の車が壊れ、この時限りで見納めとなってしまいました。

5日の学習・交流会や6日のまとめの時間に、林業の現状などについて学び、また参加して考えたことなどを話し合いました。



暑い中での下草刈り作業

現在、日本の林業は非常に難しい状況にあります。日本は国土の66%が森林という世界有数の森林国であるのに、1960年に木材の輸入を自由化して以降、安い外材に押され、自給率は減少を続け1999年には20%を下回りました。それに伴って林業就業者数も約6分の1まで減少し、1999年には65才以上の割合が30%近くになりました。

家の柱として使う木材は50~100年ものといわれます。今切り出している木は親あるいは祖父母の代に植林されたものですが、前述のような理由で手入れされていない山では50年経っても木材として使える木は育ちません。山主さんたちはこのことを良く知っていますが、手を入るとかえって赤字になってしまうので私たちが直接関係のあることでは私たちが欲しいと言えば、日本産木材は増えていくはずでは

人間を含む動物が山の恵みを活用するだけでなく、自然のサイクルの

中で大切な保水等の役割も担っています。ところが現在、動物たちが山の麓の畑にでてきたり、土砂崩れが起きたりしています。人間が自然のバランスを崩してさらに人災が起これという悪循環に陥っています。

そもそもなぜPHD協会が林業体験を始めたのか?それは13年前にさかのぼります。10周年を迎えた時に過去を振り返り、今後のことを考えました。研修生に対して私たちは「村を良くするためにがんばって。」と言ってきたけれど、彼らに言うだけでなく日本にいる私たちも生活や社会を良くするために何かしなくてはいけない、彼らが研修することを少しでも知ろう、との思いからさまざまなプログラムを企画しました。林業、漁業、農業などの体験を催しました。石油・電気・ガスなどの大量のエネルギーを使う生活が、水や土に悪影響を及ぼしていることを知らないながら、なかなか生活を変えられないのは自然を身近に感じられないからではないでしょうか。林業体験や農業体験は、自然と命について考える場になると思います。そして国際協力という仕事において、また自分の生活において何らかの形で反映させていくことも必要だと考えています。

もう1つ思うことは、便利になるということは「人間の能力が衰えていくこと」ではないかということです。例えばエアコン。少し暑い時、少し寒い時につけて常に一定の温度に保つと体温調節の機能は衰えるでしょう。夜も眠れないほど暑い時に我慢することは無いと思いますが、一事が万事この調子では人間が持つ様々な力は必要なくなります。今、人間の生活はいきすぎているのではないのでしょうか?ちょうど良いところで立ち止まり、他の動物や自然環境を見直す余裕を持てるようになると良いのに、と思います。目先の利益・欲望に流されず、次の世代を見据えて生活しなければいけない時代になっているのではないのでしょうか。

寺田栄

ケンターウエ (通称マウエ) さん (ビルマ、女性、21才)

マンダレー市近郊イエボ村出身。イエボ村は人口約2000人。炊事には薪、生活用水は井戸、電気はきておらずローソクや中古のバッテリーを電源にした電球を使っています。隣り村のタダインシェ村からは5名の研修生を招きましたが、この村からはスウェウィンさん(02年度)に引き続いて2人目で、初めての女性研修生になります。

マウエさんは両親と弟3人、妹1人と暮らしています。家の農業や家事を手伝いながらマンダレーにある大学にも在籍中。家では米、豆類、マンゴー、ゴマ、唐辛子などを作っていて、牛、豚、鶏も飼っています。この地域では90年代後半から政府の政策により米の2期作が強制され、正しい使用法やその危険性が説明されないまま多くの農薬、化学肥料が使用されるようになっていきます。



主にタイや中国からの輸入品が多い

また、村には病院がなく、保健衛生に関する教育もほとんど行われていません。そのため、子供やお年寄りに下痢が多かったり、無理な中絶が行われ母親が亡くなるケースも聞きました。

日本では、有機農業に関する基本的な知識及び保健衛生、栄養、保育について学ぶ予定です。

<滞在家中>

井澤久夫さん・裕子さん宅

(神戸市兵庫区)

ホストファミリーをするのは今回が初めてとは思えない程、自然体の井澤さん一家。マウエさんと同世代の娘さんが二人いるので「娘が一人増えたような感じ」というお母さん。「豆板醤や唐辛子などを使った料理

のレパートリーが増えました。それから掃除もよくしてくれるので家がきれいになった」そうです。

お父さんは「ビルマという国に関心を持つようになったと同時に、日本に住む今の自分たちの生活を振り返る良い機会になっています」と話して下さいました。



エルリナ (通称エリ) さん (インドネシア、女性、29才)

一洋裁・保育・保健衛生研修一

1. 太陽保育園 (兵庫県八鹿町)
岸政次郎 (滞在・アレンジ/八鹿町)
2. くらふと・ぎやらりー多田 (芦屋市)
3. 高橋武子 (三木市)
光田弘・和子 (滞在/神戸市西区)
4. くらふと・ぎやらりー多田 (芦屋市)
5. はらっぱ保育所 (西宮市)
6. 三木市健康福祉部健康課、
兵庫県三木健康福祉事務所 (三木市)
福永隆昭 (滞在/神戸市西区)
光田弘・和子 (滞在/神戸市西区)

<敬称略>

太陽保育園では、調理室に入り園児たちの昼食を作るお手伝いをしながら、調理前後の手洗いの大切さ、調理器具の消毒法、離乳食の調理法などを研修しました。「村のお母さんたちの知らないことばかり。例えば、タベ村では赤ちゃんには柔らかくしたご飯をたくさんあげて、野菜や肉は少ししかあげません。もっと色々な食べ物をバランス良く食べさせることが大切とわかりました」

また、三木市での保健衛生研修では、タベ村にある問題点をエリさん自身が再認識することができました。まだはっきりとはわかりませんが、避妊薬の副作用、産後の栄養補給不足、日々の食生活でのカルシウム不足、砂糖や油の取り過ぎ等が原因で、特に村のお母さんたちに肥満や歯の悪い人が多いようです。健診の結果、エリさんも上記の問題を抱えている

研修生レポート

皆さんにご心配をおかけしてましたマウエさんは、6月16日に無事来日。6月23日から5週間、神戸YMCAで日本語研修を行いました。マンツーマンでの指導だったことや彼女も来日前に日本語をある程度勉強していたこともあり、短期間でかなり上手になりました。神戸YMCAの先生方や毎日PHDの事務所で復習のお手伝いをしていただいたボランティアの皆さん、本当にありがとうございました。

誰とでも明るく楽しく話しかけて、どんどん日本語が上達しているエリさん。豊富な知識と経験に基づいた鋭い観察力を持つアンディさん。それぞれ

ことがわかったため、栄養や生活習慣病に関するプログラムには特に興味をもってしっかりと取り組んでもらいました。そして、これからの日本での生活の中でも実践していこうということになりました。



乳児の身体測定法を学ぶ (三木市)

アレハンドロ・スミフカイ・バナ (通称アンディ) さん (フィリピン、男性、31才)

一農業研修一

1. 橋本慎司 (兵庫県市島町)
2. 藤井誠次 (神戸市北区)
3. 上垣春雄 (兵庫県大屋町)
4. 渋谷富喜男 (神戸市西区)
5. 牛尾武博 (兵庫県市川町)

<敬称略>

アンディさんはフィリピンで農業の専門学校を卒業し、村の有機農業グループに参加したり、他のNGO(伝統的な在来品種の種子の保存・普及活動を行っている)の活動にも積極的に関わっています。そのため、技

体調を崩すこともなく順調に現場研修をスタートさせています。



日本語特訓中のマウエさん
(神戸YMCA)

術的なことはもとより、グローバリゼーションや遺伝子組み替え作物の問題点などについても、すでにかなりの知識を持っており、特に橋本さんの所では英語を使ってかなり突っ込んだ話をする事ができました。

これまでの研修の中では、アイガモ水稲栽培、自家採種、提携システム(生産者と消費者が「顔の見える」関係を築きながら農作物の売買をすること)が特に興味深かったそうです。「なんとかマニラに消費者グループを作って、村でできた有機農作物を買ってもらえるようなシステムを作りたい」と抱負を話しています。



オクラの定植作業 (市島町)

そんなアンディさん、「日本人はお金持ちなのに有機農産物をあまり買わないのが不思議。もっとおいしくて安全で体に良い食べ物に敏感になって買うようになれば、有機農業をする人も多くなるし、有機農作物もたくさん作られるようになり、いい循環が生まれるのに」など、日本社会への疑問も色々と感じ始めているようです。

(納堂邦弘)

帰国研修生短信 (ビルマ)

◆ ティンアンウィンさん (92年度)

NGOで、HIV/AIDS予防の仕事をしています。村と活動現場との行き来で忙しく、家族や他の研修生たちと話す時間が少ないのが問題です。しかし、NGOで働くことによって、海外出張や様々な人と話す機会が増え、いろいろな情報や知識を得ることができるので、それを村の人たちと共有しています。



研修旅行にも参加しています。



ムームーさん(左)、カインソーさん(右)

◆ トウンティンさん (93年度)

16エーカーの田んぼで、7月に稲刈りをしたばかり。平均2000kg/エーカーの収穫(もみ米)。株の間は34x26cmで、1株あたりの苗は1~2本。いつもは7月に2回目の田植えをしますが、今年は雨不足でまだです。苗はきちんと畦を立ててから籾を播いて作っています。畑では、菊、いんげん豆、トマト、キャベツ、カリフラワー、豆を作っています。豆に虫がたくさんついて、手で取るしかないのが大変。堆肥には鶏糞、マンゴの葉、糞、牛糞を使っています。牛は雄4頭、雌2頭、子牛が2頭います。



◆ ムームーさん (93年度)

引き続き、幼稚園で働いています。現在54人(60円/月)の子供を、基本は8時~4時まで、親の都合によっては朝の6時半~夕方6時まで預かります。先生はムームーさんを入れて3人。ムームーさんは月に2300円もらっています。小学校を終えた子供たちも幼稚園に来て1時間程遊び、4時から6時まで勉強をして家に帰っていました。

◆ カインソーさん (96年度)

親の田畑の手伝いをしており、4月~7月まではマンゴの出荷で中国の国境近くまで出掛けました。マンゴの収穫等の手伝いに3人雇っています。村のグループや研修生たちとミーティングをしたり、他の村での勉強会やミーティングをする

◆ スウェウィンさん (02年度)

親の7エーカーの田んぼのうち、2反の田んぼで、帰国した次の日に田植えをしました。使った苗は通常の1/5。田植えをした時には、あまりにも苗が少ないので、親も周りの人も不思議に思っていました。立派な穂がつき、皆びっくりしています。お父さんが「次は、もっと良い田んぼでやってみても良い」と言ってくれたので、喜んでいました。

アイガモ水稲栽培にも挑戦しています。1000羽購入しましたが、まだ小さい時に大雨が降ったり、田んぼから出す時に全部きちんと出し切ることができず、へびに食べられたり、盗まれたりで、375羽くらいにまで減少。日本のようなネットの囲いはなく、田んぼとアイガモの小屋が離れていることもあり、管理が難しいようです。世話以前からアイガモを飼っている人に任せています。大きくなったら1羽80円で売り、純利益を半分ずつわける予定です。

畑では、自給用にゴマと豆を、自給と換金用には、とうもろこし、トマト、マンゴ、バナナ、レモンを作っています。トマトは普通10月頃に作りますが、みんなが作らない時期に作ってうまくいけば高く売れると思います。作っていますが、虫や病気が多くて困っています。畑にある井戸はかなり深く



一番左が自分で田植えをした稲穂

共に生きる社会を目指すために「私たちが足元でできることは何なのか」を考えるミーティングを11月から始めていることは86号で紹介しました。今回はそのメンバーのひとりである、おしたようさんの思いをお届けします。

「学び」へのあこがれ

私が初めてPHDの事務所を訪ねたのは、「小学校の先生になりたいな」という夢はあっても、なかなか形にならず焦り始めていた頃だった。

私はそこで、「国際協力ワークショップ」※のチラシをもらった。学生のころ、「ワークショップ」と名のつく活動がはやりだしていたが、自分が体験して見たことはなかった。私も教師志望のはしくれ(免許はなかったけど)。“参加型の学習”という美しい響きにひかれて、行ってみることにした。

自分をみつめる

ワークショップを通して「世界」のアンバランスな構造が少し見えてきたが、一番見えてきたのは、わたし自身の有り様だった。

「協力」なんてそっぽむいて目の前のピースだけに必死になっている自分。見知らぬ国で言葉が通じないことがとても不安で足がすくみ、写真の1枚も撮ることのできない自分。

「協力」ってそんなに簡単にできることではない。まずは自分自身が相手の存在を認め、「協力」を担うことができる人間になることが大切だな、と実感した。

他者とかかわる

このワークショップをきっかけに集まった仲間が、次の年のワークショップの運営をしたり、子ども向けのレターを作ったりした。

メンバーの職業や年齢は様々。それぞれの異なった経験から発信される、異なったものの見方を知り、自分のものにしていくことは、本当に新鮮で、楽しい経験だった。

「行動」をおこそう

6回続いたワークショップ。その一定の役目を終えたのか、参加者数が少し下火になってきた。これからはもっと別の学びがあるときにきたのかな。今まで机の上での疑似体験をたくさんしてきた私たち。“参加”から一歩踏み出して“行動”しながら学んでみよう、という話が持ち上がった。では何がやりたいか？という中から出てきたのが、実際に食べるものを自分たちで作ってみよう、というアイデアだった。

PHDの研修生たちは、有機農業を学ぶことを通して、自分たちの暮らす場所の自然や自分たち自身を大切にしていける生き方を考えている。



では、日本に住む私たちはどうだろうか？有機農業とかスローフードなどという言葉が少しずつ知られるようになる一方で、農業の問題、食品添加物、ファーストフードのあり方など、食にまつわる課題は多い。食べるという一番大切なことに、無頓着になっていなかったか。

「それなら、いいところを知っているよ」と、メンバーの一人が、学童保育所“どんぐりクラブ”を紹介してくれた。子どもたちと荒れた土地を耕し、土に何トンもの堆肥と生ごみを埋め、自分たちの力でよみがえらせた畑の作業を手伝わせてもらえることになった。また、自分たちでも家のベランダや庭、職場で何かを育てて、その様子を交流することにした。

新たな出会いが教えてくれた事

4月の初めてのクラブ訪問から4ヵ月。今は月2回、参加できる範囲で畑での作業を手伝っている。クラブの子どもたちも、指導員さんも、私たちをあったかく迎えてくれ、「畑の片隅に、皆さんも作物を植えていいよ」とまで言ってくださった。自然の循環を壊さないように、とすすめられる作業。作物はみんな嬉しそうに、元気に育っている。

子どもとの関わりを楽しんだり、指導員さんのお話を聞いたり、農作業から得るものはもちろんだが、参加している一人ひとりが、新しい出会いから、それぞれ別々の何かを発見している。ちなみに私は、子どもの頃父の家庭菜園を手伝っていたことを思い出した。毎日当たり前に食べていた野菜たちにこめられた、父の思いにふれた気がした。

「学び」とは

さて、私はこの6年ほどの間に、念願の？「先生」になることができた。「せんせい」とは呼ばれないこの場所での「学び」は、子どもたちとの毎日にも生きている。私は「学び」とは、「自分をつくりかえる過程」だと思っている。

そしてその変容は「行動」し、自分の生き方を見つめることによって、実感することができる。

PHDでの経験を通して、私も色々な面で自分をつくりかえてきた。学校でも子どもたちと共に、この楽しさ(そしてそれにとまなう苦しさも)をたくさん体験していきたいな、といつも思っている。

元気いっぱいいていつもみんなの心を和ませてくれるおしたさん。PHDの仲間にはこんな魅力的な人がワンサカです。このシリーズでは足元での活動に取り組む人たちが、それぞれの思いやこの試みの過程をそれぞれの視点で語っていきます。続きます！

※「国際協力ワークショップ」1996年～2001年まで開催。海外での出来事や、そこに暮らす人たちの生活と自分たちとの関わりを、参加型のゲームなどを通して考えました。

会費を通してそれぞれの思い

6月の会報とともに会費納入のお願いをお送りしました。「PHD月間ってあったんだ。知らなかった。」と、たくさんの方から反響がありました。毎年6月に会費のお願いをし、6月と7月の2ヵ月間で年間会費収入の約半分をいただいています。今年度は年間会費収入の目標を900万円としており、今年の6月と7月では400万の会費収入となりました。金額的には例年よりやや少ないですが、件数は30件の増加になっているのです。件数の増加に金額が比例しないというのはここ最近の特徴です。何はともあれ、PHDの活動を必要だと思っていただき、継続して応援していただくと思ってくれる方が増えている

ことに、改めて感謝するとともに勇気づけられています。

一方で退会のお申し出も例年以上となっています。このことはとても残念なことではありますが、中にはご事情について、高齢になったこと、病気になったこと、そして最後には私たちへの励ましの言葉が添えられています。何の連絡もないままやめられていくことも多い中、私たちの思いを受けとってくださいていることをうれしく思っています。

8月に3年間の会費未納の方111名に最後のお願いをしました。どういう結果になるかは分かりませんが、それぞれの思いが繋がっていかばと思っています。

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

5月	60件	938,063円
6月	157件	1,415,512円
7月	642件	4,739,460円
	859件	7,093,035円

以上の通り、多くの皆様よりご浄財を頂戴しました。会費ではPHD月間として皆様よりご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

今後とも皆様からのより一層のお支えをお願いいたします。

◆PHD公用車 ご寄贈いただきました

7月17日に当会会員の高橋逸様(加古川市)より、トヨタ・タウンエースをご寄贈いただきました。前の車がちょうどその時期に故障したため、大変ありがたいお話となりました。走行距離がわずか2.2万kmの車で、快調に走っています。ありがとうございます。

◆林業体験合宿「枝打・間伐」参加者募集!

今秋も(財)大山振興会との共催により、11月上旬に第13期林業体験合宿を行ないます。篠山市大山地区の枝打ち・間伐の作業を通じて、日本の林業の現状を学び、自分の生活を見直してみませんか。お誘い合わせの上、奮ってご参加下さい。お問い合わせ・お申し込みは、担当納堂まで。

◆東日本・西日本研修旅行のご案内

今年も活動の報告やお礼、研修生の社会学習等を目的とした研修旅行を行います。各地で交流会を予定していますので、お近くの方は是非ご参加下さい。

<予定>

- ・東日本(11月中旬～下旬)
福井-岐阜-愛知-神奈川-東京
-山梨-長野-富山-愛知
- ・西日本(1月中旬～下旬)
宮崎-鹿児島-熊本-大分-福岡
-山口-島根-広島-岡山

○月×日のPHD協会

職員 藤野 PNGのツアーにJICA関係者が現地合流。モノ、カネを持っていかないPHDだけの時と違う、訪問先の盛り上がり「うーむ。」

職員 納堂 研修滞在家庭から今ブームのチタン・ネックレスを勧められ、つけて寝る。肩こりが治り楽になる。他にもいいことがあったとか。

職員 寺田 今年の夏は花火にはまる。神戸メリケン波止場、加古川の打ち上げのドバーツというのが快感だそう。家の近所でこじんまりも。

職員 佐々木 ウコン、黒酢に飽き、次の健康法はお昼にソバ。コレステロール値を下げる目的らしい。でもコンビニソバでは効果も期待薄では。

職員 芳田 ビルマにおでかけ。夜行列車、トラックの荷台、日本の中古バスに村では牛車と各種乗り物を堪能。とどめは水牛にまたがってご満悦。

職員 古本 指導農家の農作業のお手伝いに。近くの沢でカニを発見。農家のお父さんに勧められ、ハサミだけ取って口へ。甘い。本体はまた川へ。

以上、普段事務所にいる確率が低い順

年末年始恒例 12月23日～1月2日(予定)

「PHDタイスタイツアー」

参加者募集中

～今年は北と東北に行きます～

帰った研修生たちの村を訪れ、ホームスティをしながら、村の生活を体験する旅。いつもは北部だけですが、今年は、東北部の農村も訪れる予定です。

北部には山岳民族カレンの人が住んでいます。伝統工芸品である草木染め手織布のグループがあり、彼女たちの布を見ることもできます。また、東北は乾季になると農業をすることが困難なため都市へ出稼ぎに行くことが多い地域です。

日本での普段の生活から離れて2

つの異なる村を訪れ、アジアの村のこと、日本のこと、世界のことを考えませんか。友達を作れば、その国のことがもっと身近に感じ、そこから何かが変わるはずですよ。

まだ、参加されたことのない方はぜひ。もうすでに参加いただいた方も、もう一度訪問してみませんか？タイの村びとと共にクリスマスと正月を迎えましょう。

現在、パンフレットを作成中です。お問合せ、お申し込みは、事務局までご連絡下さい。